

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

新 知 大 温

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2019.12 Vol.35

令和1年12月発行

発行所 静岡文化芸術大学 図書館・情報センター
 〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号
 TEL(053)457-6124 FAX(053)457-6125
<https://www.suac.ac.jp/library/>

Contents

■表紙

世界古地図集成：
秋岡コレクション ——— ①

■図書館散歩

経済発展を深く考えるための12冊 ——— ②

文化政策学科 教授
四方田 雅史

鏡の中のゴキゲンな「あおむし」 ——— ③

デザイン学科 准教授
かわ こうせい

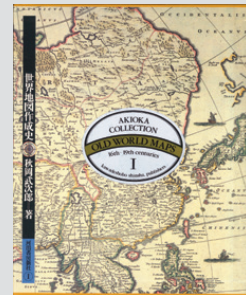
■特集

わたしの1冊 ——— ④

～おすすめの本を紹介します～

■巻末

図書館ニュース ——— ⑧



世界古地図集成：秋岡コレクション

東海企画出版[編集・制作]
河出書房新社、1988年

貴重書庫 [290.38/A 36]

今回は、当センターで所蔵する歴史的な地図資料をご紹介します。『世界古地図集成：秋岡コレクション』は世界地図の研究資料で、秋岡武次郎[著]『世界地図作成史』、世界古地図複製12葉、世界古地図集成（カラー映像、VHSビデオテープ）、世界古地図集成（カラー画像、ポジティブ・フィルム）の4点で構成されています。

本書の資料名「秋岡コレクション」にもある秋岡武次郎（1895～1975）は、陸軍士官学校や法政大学で教授を務めた地理学者です。古地図の考証や研究に携わり、『日本地図史』『日本古地図集成』などを著したほか、日本地理学会の創立にも尽力しました。古地図の収集家としても知られ、コレクションは神戸市立博物館などに寄贈されました。

本書の構成物のひとつである『世界地図作成史』は、秋岡武次郎の長年の研究成果の集大成です。安土桃山時代から江戸時代末期までに製作された世界地図について考証されているほか、屏風に描かれた地図、中国で製作された地図、仏教式の世界地図、さらには地球儀や天球儀に至るまで考察されており、世界地図製作の歴史を知ることができます。

本書には、資料閲覧用にVHSビデオテープとポジティブ・フィルムが含まれています。本書が刊行された当時は、これらのアナログ方式が主流でしたが、それから約30年が経過し、資料はデジタル化されることが多くなりました。保管する媒体は時代と共に変わっても、歴史的な資料は後世の人々へと引き継がれていきます。

参考文献：秋岡武次郎[著]『世界地図作成史』[290.38/A 36]

日外アソシエーツ[編]『昭和人物事典：戦前期』[281.033/N 71]



文化政策学科 教授
四方田 雅史
 Yomoda Masafumi

本文中に登場した図書

アダム・スミス〔著〕;大内兵衛、松川七郎〔訳〕 『諸国民の富』 331.42/Sm 5/1 331.42/Sm 5/2
シュムペーター〔著〕 塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一〔訳〕 『経済発展の理論:企業者利潤・資本・信用・利子 および景気の回転に関する一研究』 081/1 95/W147-1 081/1 95/W147-2
R.N.ベラー〔著〕;池田昭〔訳〕 『徳川時代の宗教』 081/1 95/B472-1
寺西重郎〔著〕 『経済行動と宗教: 日本経済システムの誕生』 332.1/Te 56
エリック・ウィリアムズ〔著〕;中山毅〔訳〕 『資本主義と奴隷制:経済史から 見た黒人奴隷制の発生と崩壊』 332.33/W 74
川北稔〔著〕 『砂糖の世界史』 081/1j 1/276
I.ウォーラーステイン〔著〕;川北稔〔訳〕 『近代世界システム:農業資本主義と 「ヨーロッパ世界経済」の成立 1』 332.06/W 36/1
K.ポメラントツ〔著〕;川北稔〔監訳〕 『大分岐:中国、ヨーロッパ、 そして近代世界経済の形成』 333.6/P 78
D・C・ノース、R・P・トマス〔著〕; 速水融、滝本洋哉〔訳〕 『西欧世界の勃興: 新しい経済史の試み』 332.3/N 96
アブナー・グライヴ〔著〕;有本寛〔ほか〕 訳 『比較歴史制度分析』 332.04/G 84
グロン・アセモグル、ジェイムズ・A・ロビンソン〔著〕; 鬼澤忍〔訳〕 『国家はなぜ衰退するのか: 権力・繁栄・貧困の起源』 332/A 15/1 332/A 15/2
アビジット・V・バナジー、エスター・デュフロ〔著〕; 山形浩生〔訳〕 『貧乏人の経済学: もういちど貧困問題を根っこから考える』 331.87/B 18

経済発展を深く考えるための12冊

なぜ国によって豊かさに違いがあるのか。そもそも経済成長、または経済発展とは何か。これは簡単なように見えて実は難しい。経済学は長年この問題に立ち向かってきたと言ってもよい。

私が最初にこの問いに興味を覚えたきっかけは1992年に行ったロシアなど旧ソ連の旅行だろう。ソ連崩壊の直後であり、旧ソ連諸国は市場経済への移行がうまくいかず、当時経済状況は最悪であった。製品の質は悪い、犯罪やアル中が社会問題となり、ハイパーインフレにも国民は苦しんでいた。そこで、経済がうまくいかないと本当に人は貧しくなり、健康や治安・幸福度も悪化するのだと思ひ知る。そして現在では常識である経済成長自体、人類史上ずっとあったわけではなく、近代以降の、それもごく限られた地域で起きた現象であることも知った。

そこから、経済発展を考える学問としての経済学、その中でも経済史を選んだ。そもそも経済学はこの問いを正面から扱う。「経済学の父」アダム・スミスも、『諸国民の富(国富論)』の中で富(商品)を増やすには分業と資本蓄積が重要だと喝破した。シュムペーターは『経済発展の理論』で彼以前の経済学に発展の論理がないことを批判し、企業家が独占利潤を得ようとこれまで行われてこなかった「新結合」を行い、それが経済を発展させる原動力であることを理論化しようとした。同書の理論からみると、こうしたダイナミズムが社会主義では働かなかったのかもしれない。

世界に豊かな国と貧しい国があるのはなぜか。この問いにも確たる答えがあるわけではない。産業革命が始まるまでの国・地域の1人当たり豊かさはさほど違わなかったが、西欧で初めて1人当たり所得の長期的拡大が見られるようになった。なぜ西欧だったのか、この問いも多くの経済学者や社会学者が答えようとしたものである。有名なヴェーバー『プロテスタンティズムの精神と資本主義の精神』は、その理由をプロテスタントの中にある倫理に求めた。非キリスト教圏でいち早く近代化を遂げた日本についてはベラー『徳川時代の宗教』が江戸時代の石田梅岩の石門心学に求めた。最近では、寺西重郎が同様の問題意識から『経済行動と宗教』を著し、日本における仏教の易行化が、違いを伴いつつもプロテスタントに対応する精神を生んだと述べている。この分野もまだ議論が絶えない。

こうした経済発展の格差をその国の内部を見るだけではなくグローバルな視点から捉えるべきだという見解も根強い。そこには先進国が途上国を「搾取」して豊かになったという論理がある。その先鞭をつけたのはエリック・ウィリアムズ『資本主義と奴隷制』であろうか。それを砂糖に焦点を当ててわかりやすく論じた川北稔『砂糖の世界史』や、こうした立場を近代世界システム論という視点にまで拡張させたI・ウォーラーステインの『近代世界システム1』をはじめとする一連の著作もその延長線上にある。最近では、西欧と中国は前近代まで生活水準や市場制度においてほとんど違いはなく、近代に両地域の経済を分岐させた理由として、西欧が環大西洋圏の資源を活用できたという偶然的要素に求めるポメラントツ『大分岐』も、旧来からある常識を覆したために私にとって刺激的な本であった。

冒頭に述べた私の体験、社会主義の失敗を考えると、経済取引を規定する制度の問題も避けられない。この潮流に先鞭をつけたのはノースとトマスの『西欧世界の勃興』であろうか。イギリス・オランダが先んじて近代経済成長を遂げた理由を財産権の確立にもとめる議論である。その後も制度に着目した研究は多く、そのうちA・グライヴ『比較歴史制度分析』は、中世に地中海を雄飛した中東のマグレブ商人とイタリアのジェノヴァ商人の商業取引を支えた制度の対比を、ゲーム理論を援用するなど理論と歴史を融合させて論じた本である。アセモグルら『国家はなぜ衰退するのか』も途上国を含めた制度の違いを組上に載せた最先端の著書である。制度が搾取的か、内包的かによって経済成長の可能性が異なってくることを、経済学と政治学をも融合させつつ論じている。

近年は、実際に途上国のフィールドで実験を行い、その結果から経済発展に導くための方策を見つけようとする手法も人気である。その成果を紹介したものとして、バナジーとデュフロ『貧乏人の経済学』を挙げよう。そもそも社会で実験できるのか、各地で行われてきた実験の成果を他地域や異なった状況に適用できるのかなど、疑問視する向きもあるが。

いずれにせよ、ある国民が豊かになり、また貧しいままにいることの理由や背景はまだ分からないことが多く、これまでも歴史や現状がそれを明らかにするための題材となってきたことが分かるだろう。そしてこうした世界的名著が日本語訳で読めるという現状にも感謝しつつ。



デザイン学科 准教授
かわ こうせい
Kawa Cosei

本文中に登場した図書

ホフマン[作]:神品秀夫[訳]
『黄金の壺』
081/R95/R414-1

ジョン・H・カートライト[著]:
鈴木光太郎、河野和明[訳]
『進化心理学入門』
140/C 23

アンドリュー・ニューバークほか[著]:
木村俊雄[訳]
『脳はいかにして「神」を見るか:
宗教体験のブレイン・サイエンス』
491.37/N 68

中沢新一[著]
『森のパロック』
081/Ko 191/1791

鴨長明[著]:浅見和彦、伊東玉美[訳注]
『発心集:現代語訳付き』
913.47/Ka 41/1
913.47/Ka 41/2

エリック・カール絵本美術館ほか[著]:
前沢明枝[訳]
『Artist to artist:未来の芸術家たちへ
23人の絵本作家からの手紙』
726.601/E 67

エドワード・チャンセラー[著]:
山下恵美子[訳]
『[新訳]バブルの歴史:
最後に来た者は悪魔の餌食』
338.1/C 33

ルイス・キャロル[作]:
リズベート・ツヴェルガー[絵]:石井睦美[訳]
『不思議の国のアリス』
726.6/C 22

ジャン・ボードリヤール[著]:
今村仁司、塚原史[訳]
『消費社会の神話と構造』
331.87/B 28

アリストテレス[著]:
加藤信朗[訳]
『ニコマコス倫理学』
131.4/A 761/13

鏡の中のゴキゲンな「あおむし」

大学生のアンゼルスは、ヘマばかりやらかす自分に嫌気がさして、エルベ川を眺めていました。すると、頭上からクリスタルの鈴を鳴らすような音が聞こえてきます。ニワトコの樹のウロをのぞくと、緑がかった黄金色に輝くヘビがこちらを見えています。彼はすぐに、寶石のように深く澄んだ青いひとみを持つヘビの精ゼルペンティーナに、身を焦がすほど激しく魅せられてしまいます。『黄金の壺』はこんな風にはじまる美しい幻想文学ですが、この大学生、ちょっといただけません。

私は、ふだん絵本を描いたり授業をしたりしながら、子どもたちや大学生には、ゴキゲンな人生を歩んでもらいたいな、と願っているからです。

ただ、ゴキゲンな日々というのは、そうそう簡単ではないようです。ひとが不機嫌になりやすいわけを『進化心理学入門』が教えてくれます。私たちの思考と感覚は、厳しい自然を生きのびて子孫を残すために、生存競争をとおして「設計」されました。しげみを見るたびに「ヘビが飛び出してくるかもしれない」とおびえることは、心の健康を損ねるかもしれませんが、祖先がおびえ続けたことで無事に生きのび、私たちが生まれたのだ、というわけです。精神科医のアロン・ベックは、「血筋が生きのこる代価は生涯にわたる不快かもしれない」と記しています。脳内の無意識下では、断片的なモジュールに分かれた「思考」同士が、食うか食われるかの生存競争を繰り返して、その勝者が意識にあがってきます。その勝敗ルールは、何万年も前に定められたもので、現代社会には合わなくなってきています。私たちは「自分で思考をコントロールしている」と思いがちですが、その実は自動装置のようなものなのです。冒頭の大学生は、そんな思考回路のなすがままクヨクヨして自分を苦しめ、しかも危険なヘビに近づいてしまいました。

不機嫌な心をはなれた究極にゴキゲンな状態といえば「悟り」でしょう。『脳はいかにして「神」を見るか』では、キリスト教における「神との合一」や仏教における「禅定」など、悟りの体験へといたった人々について、脳神経学的な見地からその秘密をさぐっています。彼らの脳では、空間認識をつかさどる「方向定位連合野」への感覚入力が遮断され、自他の境界が溶けだすといえます。

自己と他者の境界があいまいな「粘菌」の研究をとおして、内と外がメビウスの帯のようにつながった生命論を提唱したのが、南方熊楠でした。『森のパロック』の、粘菌から密教曼荼羅へとひろがる壮大な世界観には圧倒されます。柳田國男に「日本人の可能性の極限」と言わしめた、微生物に宇宙をみる生態学者は、熊野の山奥にひっそりと住まっていました。

『発心集』にも、高い徳をつみながら、市井でひっそりとゴキゲンに暮らす名もない偉人たちのエピソードがちりばめられています。帝の使いを無視して楽しく演奏しつづける笛吹きなど、童心を失わず「今に生きる」ひとびとの奇行には、清々しい風を感じます。

子ども心を創作のエネルギーにするエリック・カールは、『ARTIST to artist 未来の芸術家たちへ 23人の絵本作家からの手紙』で「自分のなかにいる“子ども”を楽しませ、ときにはその子の心をゆたかにしてあげることを目指しています」と述べています。彼がカラーージュしたカラフルで食いしんぼうな「あおむし」は、「まだまだ おなかは ペっこぺこ」と言っでは、りんごからアイスクリームまであらゆるスイーツを食欲に食いあさります。これは、際限なくふくらむ、ひとの欲望のメタファーとも読めます。

『バブルの歴史』では、古代ローマにはじまり現代中国まで古今東西の人々が、より大きな富をもとめて一喜一憂する様子から、くり返される歴史のパターンが手に取るように見えてきます。

バブルを重ねながら帝国を肥大させるイギリスで生まれた『不思議の国のアリス』にも、水パイプの煙をくゆらせる「いもむし」が登場します。こちらは、あらゆるものに関心がない不機嫌のかたまりです。ルイス・キャロルは、続編でアリスを鏡の国へと迷いこませます。未来を予見したのでしょうか。キャロルから100年後にボードリヤールは、現代社会を「鏡の部屋」における無限反射の世界にたとえました。モノやサービスがあふれ、コピーのコピーが氾濫し、オリジナルな創造性の価値が失われ、似かよった人々が、ごくわずかな外見の差異を価値として競い合う、という『消費社会の神話と構造』での考察には、表現者としてギクッとさせられます。

そんな社会でもゴキゲンに生きるためには、古代のギリシャから読みつがれてきた『ニコマコス倫理学』でアリストテレスが説くように、「目的に合ったおこない」をし「中庸」の精神で「観照」するのもよいでしょう。

川辺にたたずむアンゼルス君には、これらの本をひもといいて気分を晴らしてもらいたいものです。私も少しはゴキゲンな日々を送れるように、読みかえてみます。

『国宝一遍聖絵の全貌』

五味文彦 [編]
高志書院, 2019.4
[721.2/G 62]



太鼓や鐘を鳴らして踊りながら念仏を唱えることで知られている「時宗」は、鎌倉時代の僧侶・一遍が開いた宗派です。一遍や時宗の名は、日本史を学ぶ際に誰しもが目にしたのではないのでしょうか。全国各地を遍歴した一遍の生涯を描いたのが、国宝「一遍上人絵伝」(通称：一遍聖絵)です。日本史の教科書や資料集で、彼が踊り念仏をしている場面か武士の館を訪ねている場面を見たことがあると思います。教科書でよく目にしていたこの絵巻をゼミで学ぶ機会があり、その全貌について知ることができる1冊としておすすめします。

「一遍聖絵」は1995年から6年かけて2000年に修理が施されました。その結果、絹地の裏から下地の有無が確認でき、改変や加筆がなされていたことが明らかになりました。本書では、最初に聖絵の全体像、次に建築史や時宗史の研究者、中世史研究者による談話を交えながらこの絵巻の魅力について探っていきます。さらに、これまでの聖絵研究にあたってこられた美術史、考古学、仏教史などの研究者による論考を読むことで、聖絵を多角的に見ることができます。

この絵巻に描かれている武家の住宅や人物たちの衣服は、当時を知る史的価値としても参考にされています。しかし一方で、その信憑性が低いと思われる描写もあります。例えば、各地の寺社を描いた描写においてその位置関係やお堂の配置など、いくつか矛盾している箇所が見受けられます。また、下書きの線と実際に描かれた線とは明らかに異なる箇所もあります。細部を非常によく描きつつも、絵を内容豊かなものとして作り上げようとしたのではないのでしょうか。

詞書と絵を見比べながら絵巻を鑑賞すると、絵師やその注文主の関係性、時代背景などさまざまなことに見識を深めることができる楽しさもあります。改めてこの本を片手に「一遍聖絵」と向き合った時、この絵巻の魅力に気付くことができるのではないのでしょうか。

【文化政策学部 芸術文化学科 3年 鈴木 光世】

美術を鑑賞するとき、皆さんはどのような点を意識して見ているのでしょうか。私は作品の背景や作者の意図などにかく知識や情報を総動員した堅苦しい見方をしてしまう。感動の源泉を知識や技術に求め、作品の文脈を語り、価値を共有するような見方がある種「かっこいい」見方であると思っていたのです。ところが、想像に難くないでしょうがこのやり方はとても疲れます。また、こういう高尚な鑑賞作法があるために美術に触れることを嫌厭する人もいるのだと思います。

この本の筆者は美術批評家でありながら「努力して感性をみがくことは疲れる」とはっきりと述べています。一枚の絵の前に立って、あなたは何を感じるか？—自分のこれまでの教育、慣習、経験によってその感じ方には色が付いている—「それ」でいいと筆者は言います。哀しみでも憎しみでも喜びでも怒りでも、ポジティブ・ネガティブな感情でも、どんな絵にどのように心が揺さぶられるかはその人にしか分からないものであり、まして共有などできるはずがないとも綴っています。

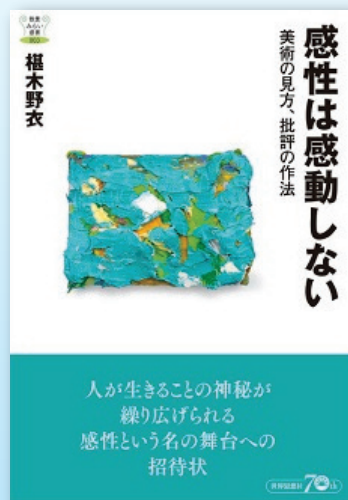
つまり、芸術における感性とは、あくまで見る側の心の自由にある、決して、高められるような代物ではない。その代わり、貶められることもない。その人がその人であるということ、それだけが感性の根拠だからだ。(pp.6-7)

筆者は本の中でこれまでの自分の経験や回想をゆるやかなエッセイ調で書いており、記憶や当時の興味・関心などが今の美術批評の根底にあることを伝えています。筆者の考えを借りれば、私たちのこれまでの、そして今の経験がきつと感性の根拠になるのでしょうか。そう思うと、小難しい知識を巡らせながら腕を組んで美術を見てきた私も、「自分はどう感じるか」ということを大事に少しのんびり作品鑑賞してゆけるような気がします。美術の見方に困っていたら、この本を読んでみることで肩の力を抜いて心から美術を楽しむためのメソッドが見つかるかもしれません。

【大学院 文化政策研究科 2年 真野 友理子】

『感性は感動しない：美術の見方、批評の作法』

榎木野衣 [著]
世界思想社, 2018.7
[704/Sa 97]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

言わずもがな、本学の初代学長、木村尚三郎先生の一冊です。けれど「写真集」というところが、西洋史学の大家が著わした数多の著作と一線を画するところでしょうか。この本は、本学図書館1階、木村文庫集密コーナーで別の本を探している時に偶然見つけました。西洋史や文明批評の数えきれないほどの著書がある木村先生が写真を撮っていらした、それも相当の情熱をもってとは露知らず、頁を繰れば、次から次へフランスの辺鄙な地にある聖堂が現れるこの本に、その場で釘付けになりました。

インスタ映えの昨今です。スマホ片手に親指をすべらせれば、世界中の行きたい街の風景に出会え、そのスマホで自分も写真を撮り、即座に発信できる時代です。デジカメもネットもなかった時代、カメラはもちろん、ズームレンズ、三脚、ストロボなど10キロほどの器材を担いで、車ではなく鉄道を主にフランスの田舎を踏破するさまを想像し、これまで木村先生のよい読者ではなかった私は、はじめて木村ファンになりました。すばらしい写真の数々です。

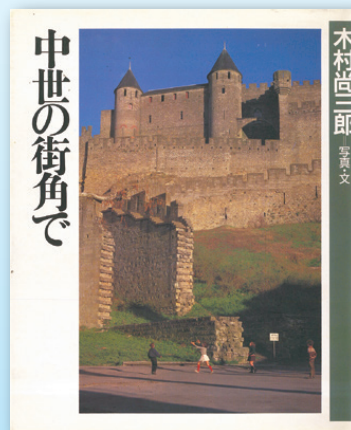
すばらしい、というのはもちろん、丁寧かつ真剣、そしてオリジナルな視線が写真から伝わってくるからなのですが、何よりも私が行きたかった、そしてまた行きたい場所がこれでもかと収められているからです。中世をテーマに、フランス全土を隈無く訪れていることが巻末の地図で分かり、なかでもロマネスク聖堂が多い南西、中央の山間部に集中しています。ロカマドゥール、コンク、モワサク、さらにイソワール、ル・ピュイと、電車を乗り継ぎ、バスを待ち、タクシーも使ってようやくたどり着く達成感が、田舎の教会探訪を少しかじっている者にひしひしと伝わってきます。なかでも見事なタンパンと聖女フォワを象った聖遺物があるコンクの頁は圧巻で、「ずっと以前から抱いて」いた「コンク村を訪ねる夢」に厚かましくも私の夢を重ねて、山間に佇むこの村を思いため息をついています。

フランスの歴史や教会建築が好きな方にお勧めします。

【文化政策学部 国際文化学科 教授 石川 清子】

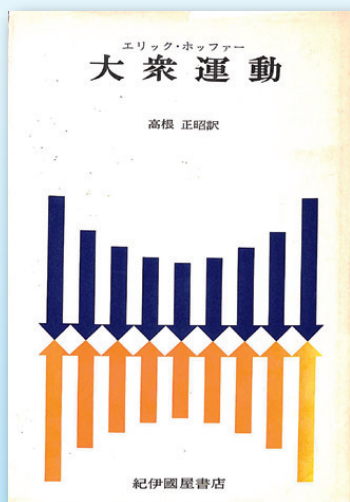
『中世の街角で』

木村尚三郎 [写真・文]
グラフィック社, 1989
[293.5/Ki 39]



『大衆運動』

エリック・ホッファー [著];
高根正昭 [訳]
紀伊國屋書店, 1969
[361.62/H 81]



「退職したら何するのですか?」。最近よく聞かれるこの質問に、ときどきこう答えています。「港湾労働者」。もちろん相手にされないか、あきれられるか、無視されるかですが、昔からの友人はニヤリと笑い、つぶやきます。「ホッファーか……」と。

本書は大学1年の「政治学」の授業で紹介され読みました。原題はThe True Believer。「信じ込み、のめりこむ人」です。久々に頁をめくってみると、少しつづめですが、次のようなくだりに線がひいてあります。「自分自身が優秀であると主張する理由が薄弱になればなるほど、人はますます、その属する国家、宗教、人種が優秀きわまりないと主張する」。「献身的な人たちは、最高度の慈善行為を行う人さえ、限りなく大きな虚栄心をもっている」。「人生の目的が価値のないように思われるとき、私たちは必死になって、自分以外のものに人生の目的を求めます。献身、忠誠、自己犠牲は、私たちの損なわれた人生に価値と意味を与えるものへの絶望的な執着なのである」。社会革命、宗教活動、政治運動のいずれであれ、人は、ちっぽけな、取るに足らない自分から「逃げ出す」ために、崇高な理念と運動に熱狂的にのめりこむのだと喝破します。政治学が面白いと思ってしまったきっかけのひとつでした。

ホッファーの洞察が再び注目を集めた契機は、原著出版のちょうど50年後の「2001.9.11」でした。日本でも2003年に本書が復刊され、「日記」「自伝」など他の著書もすばらしい翻訳での出版が続きます。「沖仲仕の哲学者」と呼ばれ、港湾労働者として働きながら思索を深めたというホッファーの生活を、学生時代、「晴耕雨読」の延長のように誤認し、埠頭での「日雇い」、ビル清掃、牛乳配達で少しマネを試みました。それがいかに愚かで浅はかな所業であったかを、後年、これら自伝や日記を読み思い知りました。にもかかわらず、「汗をかき、日銭を稼ぎ、机に向かう」生活への憧れが、退職を迎えたいまも抜きがたく残っています。愚かさも浅はかさも治りません。

「9.11」以降の諸現象をホッファーの議論でとらえつくすことができるかは疑問です。繰り返し常に読んできた本でもありません。しかし現在の自分につながる出発点を振り返る昨今、やはり脳裏に浮かぶ「私の一冊」なのです。

【文化政策学部 国際文化学科 教授 馬場 孝】

『須賀敦子全集』(第2巻)

須賀敦子 [著]
河出書房新社, 2000.5
[918.68/Su 21/2]



この本をいつ、どこで買ったのか思い出せないのですが、著者の須賀敦子さん(1929-1998)のことは鮮明に憶えています。著者は、わたしにイタリア語を基礎から教えてくれた先生で、言葉が大してできないにも拘わらず、留学に必要な語学能力証明書を書いてくれた方でした。

須賀先生の言葉はいつも清麗でした。日本語であっても、ざっくばらんな話しぶりの中に、いつも心地よいメロディが流れていました。言葉に対して天性の感覚をもつ著者は、13年に及ぶイタリア滞在から帰国後、日本語で多くのエッセイを書き重ねました。標記の全集は、それらのエッセイを収めた全8巻からなるもので、ここに紹介する第2巻には、著者の鋭敏な観察眼と感傷に傾かない均質の理性が現れているように思えます。

第2巻には50篇近いエッセイが収録されています。その中に「フィレンツェ——急がないで、歩く、街。」と題したものがあります。「…いつのころからか私は、フィレンツェの街を、ただ用もなく歩くのがすきになった。それも旧市街を、ただ、歩く。できれば、急がないで、歩く。」ピッティ宮殿の後方に広がるボポリ庭園を歩き、「ヴェルサイユやパリのチュイルリーの庭園なども、イタリア式と呼ばれるのだから、そして設計者はたぶんイタリア人だったのだから、根本的な違いはないはずなのに、ボポリの庭を見て、あっと思った。本家本元の鷹揚さというのだろうか。フランスで見たイタリア式庭園にくらべて、どこかとても自由で闊達なのだ。定規や機械で引いた線ではなく、この国の人たちのからだに組み込まれている、立体性への自然な感覚が、この庭をつかさどっているように思えた。」

いま流にいうスロライフ嗜好が読み取れ、かつ普通の人には感取しえない情趣を自然に汲み上げていける、著者の卓越したセンスが見え隠れしています。本業であるイタリア文学を読むとき、市街の建築や道路から教えられた感覚が、著者にはよみがえるのでしょうか。本書は短いエッセイの集成で、どこから読んでも愉しく感じられます。

【文化政策学部 芸術文化学科 教授 小針 由紀隆】

「吃音」をご存知ですか？国内で約100万人がこの症状を持っているといわれています。音を繰り返す連発、音を伸ばす伸発、音が出てこない難発などがあります。脳内の特定部位の神経線維密度が影響しているという説がありますが、治療法などわからないことが多い症状です。人間関係を築くコミュニケーションで問題となり、会話の場面で相手から「ゆっくりでいいよ、頑張っ！」と言われることを思いやりと捉えるか、プレッシャーと捉えるかは千差万別です。

作者である重松清氏も吃音症状で苦労され、その体験を主人公の村内先生に反映させています。居場所や目標を失った思春期の生徒たちが、吃音のある教師とどう向き合っていくのかが描かれています。

私はこの本の中で、吃音当事者のパワーを感じました。彼らは、自分の思いを僅かな言葉でしか伝えられない状況で、苦労して試行錯誤してもうまく伝わらないからこそ、伝えられることの貴重さを知っているのだと思いました。そして、吃音はリスクを冒してでも伝えようとする懸命なメッセージであり、聞く側にその真剣さが響くため、誠実さと強い意志が凝縮されたコミュニケーションツールのようであると感じました。

読み進めていく中で、この本をくださった教師から「吃音があった教員が、吃音にこだわらずたくさん喋っていたら、吃音が減った」という話を聞いたことも思い出し、自分の思いをいかにスムーズに話すかではなく、どれだけ思いを伝えられるかが重要なのだ、と気付かされました。

誰もが自分らしく生きるためには、滑らかな音声にこだわらず、人それぞれのコミュニケーション方法を用いて思いを伝え、自己実現を図ることが重要なのではないのでしょうか。自分の思いをどう伝えるかに心を砕き、どう生きるかを模索し続けている吃音症状を持つ人々から、多くのことを学ぶことができる一冊だと思います。

【修学サポート室 修学支援専門員 西澤 浩子】

『青い鳥』

重松清 [著]
新潮社, 2010.7
[913.6/Sh 28]



特集 わたしの1冊 ～おすすめの本を紹介します～

小学生の頃、流行りのアニメ番組と共に「必ず毎週観る番組」だったのが、江戸時代を舞台にしたNHKのバラエティ番組「コメディお江戸でござる」でした。歌舞伎小屋をモチーフにした舞台上で展開される物語、真っ黒な頭巾を被った黒子さん達が引切り無しに展開する舞台装置。そこで起こる珍事件の数々に、毎回笑っていたのを思い出します。この番組に長年携わっていらっやったのが、文筆家の杉浦日向子さんです。彼女の解説をまとめたこの「お江戸でござる」という本には、テレビの中で繰り広げられていたお江戸の日常が、テーマ毎に集約され、杉浦さんの描かれた挿絵と共に掲載されています。

江戸時代と言えば、徳川家が15代まで将軍を務め、鎖国によって他国との交流を制限し、独自の文化を展開していった…。歴史の授業で習った記憶を要約すれば、このようになるでしょうか。この時代の中で、何年にどんな政策があったとか、何代目が誰だったかと歴代将軍の名前をテスト前夜に必死で覚えたりもしていましたが、結局テストが終わると同時に頭から抜けていってしまいました。そんな風に、徳川幕府を中心とした長い時代。それが、学校の勉強における私にとっての江戸時代でした。

不思議な事に、あれだけ必死で覚えた将軍達は、この本の中には大々的に登場する事はありません。何故なら、この本における主人公は、各将軍でも名立たる著名人でも無く、お江戸の長屋でその日暮らし、お江戸での生活に人生を賭けるお江戸の人々だからなのです。

お江戸の文化はお江戸の人々無くして始まりません。そして、彼らによって作り上げられた文化の中には、現代もそのまま、あるいは所々形を変えて、世界中が注目する日本文化に発展しているものも多くあります。残念ながら、その立役者たるお江戸の人々の日常は、教科書に載る事はありません。どこの長屋の誰さんは、何をした人だったかとテスト前に覚える事はありませんが、その日を生きたお江戸の人々に本を通して出会うのも、中々粹だと思います。

【大学院 デザイン研究科 2年 鈴木 結子】

『お江戸でござる』

杉浦日向子 [監修]

新潮社, 2006.7

[382.136/Su 48]



“Puika, kas zīmēja kaķus: pēc japāņu pasakas motīviem”

Anita Kreituse

Jāņa Rozes apgāds, 2017

[726.6/Kr 3]



絵本といえば、誰もが生まれて初めて与えられる本だと思うのですが、皆さんは初めて読んだ絵本を覚えているでしょうか？私は覚えていませんが、今でも絵本が大好きです。そこで、ラトビアに行った時に買った思い出の絵本を紹介しようと思います。

絵本なら言葉がわからなくても絵で何となく内容がわかりますし、わからなくてもその国独特の絵や雰囲気が楽しめるので、私は海外に旅行に行ったら絵本を買います。絵本を買う時は一応調べて、作者が現地の方でその国発祥のお話のものを選ぶようにしているのですが、この絵本は調べていた絵本がなぜかどの書店にもなかったのでその場で適当に選んだものです。ラトビア語の紹介が読めなかったので本当のところはわかりませんが、国の推薦図書のようなもので、表紙が妙にヌルツとした手触りで気になり猫の絵も可愛かったので決めました。

内容ですが、まずフィーリングでいってみようと思いましたが読んでみてわかったのは、主人公らしき猫の絵をひたすら描く子どもが修行に出るお話で、猫は毎ページ様々な形で欠かさず登場し子どもを見守っているのが守り神的な立場だろうといったところ。日本の浮世絵のような絵柄で、猫の毛並みや出てくるものの質感がきめ細かく滑らかで、所々漢字のような模様が出てくる不思議な世界観だと思いました。

そしてこの文章を書く機会にちゃんと翻訳を調べて読み直してみたところ、衝撃の事実が発覚しました。あとがきによると、作者はまさに日本画に影響を受けており、内容も日本の昔話が原作だと表紙から思いきり書いてあったのです。原作となったお話は「絵猫と鼠」という東北の民話で、ざっくり言うと自然と人間の調和と成長について描かれた物語ですが、絵本にする上で作者の解釈で毎ページ主人公と共に守り神のような猫を登場させることで内容に深みを持たせたそうです。

このようなこともあります。外国ならではの謎の童話に出会うこともあり面白いので、皆さんも海外に旅行に行ったら是非絵本を買ってみてください。

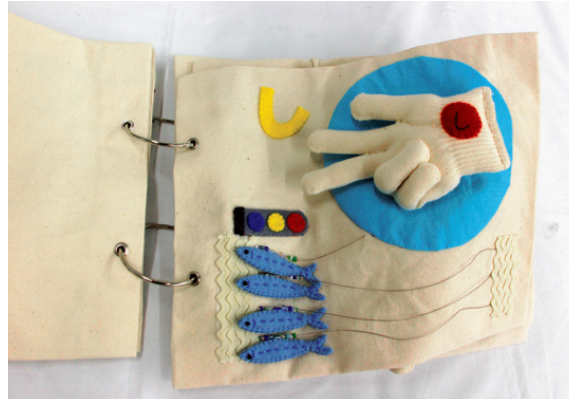
【大学院 デザイン研究科 2年 横山 萌】

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2019を開催しました

本コンクールは、ユニバーサルデザインを教育理念に掲げている静岡文化芸術大学で、「皆が一緒に楽しむことのできる絵本」の普及・発展を願って、2010年に創立10周年記念事業として始まりました。毎年、全国から秀逸な作品をご応募いただき、今年で10回目を迎えることができました。今回の審査結果は以下のとおりです。

- ユニバーサルデザイン研究賞
「ゆび物語」(全10巻) いぶき
 - 学生大賞
「おくりものをかごにいっぱい」 大江 委久子
 - 審査委員長特別賞
「いろいろな」「ちいさなともだち」 プラタルル マイヤ (4歳)

 - 《子ども部門》
 - 優秀賞
「ようこそ雪の世界へ」 米澤 史華 (世田谷区立烏山小学校 5年)
 - 佳作
「おりがみ」 樋山 竜馬 (宮崎市立宮崎西中学校 2年)
「わたしとりんちゃん」 Hiro&Nana (笠井 洋子, 笠井 菜々子)
 - 《高校生部門》
 - 優秀賞
「おかしさがし」 和久田 尚希 (静岡県立浜松大平台高等学校 2年)
 - 佳作
「あおのみち」 野中 和佳菜 (静岡県立浜松工業高等学校 2年)
 - 《一般部門》
 - 優秀賞
「もぐらのおさんぼ」 大江 委久子
「入院生活を振り返る絵本 わたしとワタン」
山本 世奈 (静岡文化芸術大学 3年)
 - 佳作
「おはながいっぱい!!!」 境 真由子 (女子美術大学 4年)
- ※受賞者の敬称は省略させていただきました。



「ゆび物語」 (ユニバーサルデザイン研究賞)



「おくりものをかごにいっぱい」 (学生大賞)



「いろいろな」 (審査委員長特別賞)



「ちいさなともだち」 (審査委員長特別賞)



「ようこそ雪の世界へ」 (子ども部門優秀賞)



「おかしさがし」 (高校生部門優秀賞)



「もぐらのおさんぼ」 (一般部門優秀賞)



「入院生活を振り返る絵本 わたしとワタン」 (一般部門優秀賞)